

---

# 離縁します！～小話集～

おこた

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

離縁します！～小説集～

### 【Zコード】

Z9765Y

### 【作者名】

おこた

### 【あらすじ】

この小説集は、「離縁します！」に感想を送つていただいた皆様へのお礼小説として作っていたものを、まとめてZIPさせていただいております。タイミングを逃した小説や、お倉入りになっていた小説などもZIPして行きますので、時系列、掲載順等は一切無視して頂けると嬉しいです。

## 田指せば 使い？

田指すば 使い？

妻「田那さま、猛獸ですって」

夫「・・・」

妻「でも、田那さまの場合には猛獸どころよりも、ぬいぐるみですよ。髪もおひげもふわふわのふわふわで、ほっぺたに触つてもふかふかの感触ですし」

夫「・・・」

妻「肌に触れているとこりよつも、ぬいぐるみの生地に触れてるみたいですね」

夫「・・・」

妻「あ、ところは、私ぬいぐるみ使いを田指せばいいんですね！」

よしじや、がんばるぞーっ！

と、勢いをつけて「ふしを振り上げた妻の後ろで、夫が自分のひげに手を当たし句やうえ込んだとか、いなかつたとか。

田舎すば 使い? (後書き)

いつして、おいたの妄想劇場が始まった、と(笑)

# 寝ぼけた自分とその顛末（夫視点）（前書き）

初の夫視点です！

## 寝ぼけた自分とその顛末（夫視点）

朝。

腕をとられる感触に反射的に相手を締め上げた。

いくら寝入っていたとはいっても、接触を許すなんて、以前なら決してしなかつた油断。自分の失態を自覚するよりも先に、接触した不審者を行動不能にするべく体が勝手に動いていた。

不審者は気づかぬうちに接触してきたとは思えないほど軽く取り押さえられ、柔らかな首に腕を押し当ただけで、抵抗どころか、身動きひとつしない。

・・・軽く？ 柔らかい？

寝起きではつきりしなかつた意識が一気に覚醒する。腕を押し当たる相手は、数日前に妻になつたばかりの、女性だった。

すぐに氣絶してぐつたりとしている体を引っ張り起にして活を入れ、意識を戻させた途端にひどく咳き込む小さな妻。

その儂げな様子に、ひどく狼狽えて、小さな腕をさする。なんてことを。

危うく自分の妻を絞め殺すところだった。触られるまで接近に気づかないもなにも、同じ寝台で休んでいるのだから、当たり前だ。

謝罪をしようと口を開きかけると、辛そうに呼吸を繰り返す妻が、

咳で潤んだ大きな目で見上げてきた。

言葉以上に雄弁に心情を語る妻の瞳に、疑問、驚愕、思案と次々に感情と思考の片鱗がよぎり、最終的に何かを決意したのが見て取れた。

「・・・今夜から、物置部屋で寝ます」

それから責めるでも怒るでもなく、淡々と物置部屋を片付けはじめ、昼に戻つて来た時にはどこから見つけて来たのか、予備の寝具まで用意されていた。

妻は本気だ。

外に出て空を見上げると、この時期独特の暗雲が立ち込め始めている。間違いなく、夜が来る前に強い雨が降るだろう。風向きは西方。

それを確認して、家の外からちょっとした細工を施した。

その夜。

物置部屋の雨漏りと隙間風がひどいから、と妻はいつも通り同じ寝台で休むことを受け入れた。

・・・妻が俺に慣れるまで、細工を戻すつもりはない。

## 寝ぼけた自分とその顛末（夫視点）（後書き）

夫視点、需要があるかどうかも分からず、とにかく書きたかったから書いちゃった小話でした・・・。

もしも夫と妻が童話の登場人物だつたなら・・・（前書き）

童話の中でキャラ達に自由に動いてもらおうと思つたのですが、ち  
よつと予想外のことが起きました・・・

もしも夫と妻が童話の登場人物だったら……

?『赤ずきんちゃん』

配役

妻：赤ずきんちゃん

夫：オオカミ

妻「この配役、断固、拒否します！　どう考へても物語通りに赤ずきんが生き残れるとは思えません！」

夫「・・・」

妻「というか、旦那さま、赤ずきんちゃんのお話を知つてているんですか？」

夫「（頷く）」

妻「え、じゃあ、最後にオオカミがどうなるかも？」

夫「（頷く）」

妻「・・・なんだか、もの凄く嫌な予感がするんですが。念のため、オオカミの結末がどうなるか言つてみてくれませんか？」

夫「満腹になる」

妻「なんで満腹で終わるんですか！？　いえ、ある意味、石で満腹になつているから合つてるのかも知れないんですけど」

夫「（チラリと妻を見る）・・・」

妻「（ぞくつ）き、急に悪寒が・・・。だ、駄目です、オオカミが満腹満足で昼寝しているといふしか思い浮かびませんつ！　すみませーんつ、物語チエンジで！・・・」

夫「・・・（妻に聞こえなによつて舌つり）」

?『シンデレラ』

配役

妻・シンデレラ

夫・王子様

妻「・・・旦那さまが、王子さま？」

夫「・・・」

妻「いえ、あの、私のイメージだと王子さまって爽やかでほつそりしてて、子供っぽいイメージがあるので。旦那さまの場合は、軍人さんとか狩人さんとかそういう力強くて厳しそうなイメージじゃないですか」

夫「・・・」

妻「衣装もなんだか旦那さまには小さそうですし。それに思つたんですけど、シンデレラが王子様を振り切つてうちに帰る場面、出来ませんよね？」

妻、まだ少し距離がある夫に背を向けて走り出そうとして、捕獲される。夫、ほぼ反射。

妻「ほら、やつぱり。離れてこれなのに、ダンス中の密着状態からなんて不可能もいいところです」

夫「・・・？」

妻「一人が出会いのは舞踏会ですから、ダンス中に鐘が鳴つてうち帰るんですよ、って、え、なんで衣装着始めているんですか、ちょっと、ああっ！？ やつぱり王子様の衣装は旦那様には小さいですねってダメ、ダメです、そんなに無理にひつぱつたら衣装が破けちゃいますよっ！？」

夫、妻に止められて王子様役、断念。

?『ロミオとジュリエット』  
名場面のみ

配役

妻：ジュリエット

夫：ロミオ

妻「……う、うーん、これだつたら場面が限定されていますし、大丈夫かな？」

夫「・・・」

妻「じゃあ、私はテラスに上がって、と。よし。旦那さまー、始めますよー、つて、あれ？ 旦那さま？」

さつさまで、上からを見上げてスタンバイしていたはずの夫がない。

妻「え、もしや私放置されちゃいまし・・・つ！？ ・・えーと、旦那さま？ 壁を登つてきちゃつたら、感動のシーンが、ただの逢引シーンになっちゃうんですけど・・・」

息ひとつ乱さずにテラスの柵まで壁を登つてきた夫。

・・・結局、どの物語も始められませんでした。

もしも夫と妻が童話の登場人物だつたなら・・・（後書き）

物語の枠の中で好き勝手動いてもらおうと思ったのに、まさか物語  
自体が始まらないとは・・・。

極秘任務・夫に無茶振りし、その反応を確認せよー（前書き）

「妻（極秘部隊所属？）から無茶振りされたら夫はどうするか？」  
がテーマ（？）です！

## 極秘任務・夫に無茶振りし、その反応を確認せよー

夫には内緒で所属した私の部隊から、極秘任務状が届きました。初めての任務です！

わくわくどきどきしながらその内容を読んだ私は、思わず、任務状を床に叩きつけてしました。

「夫に無茶振り」って、どんなだけ無茶振りですか！？

それ、私がやるんですね？

念のため、床に叩きつけた任務状の表書きを確認しますが、間違いなく私宛になっています。私にやれといっています。

ターゲットが夫という時点で、限りなく失敗に終わる気がしないでもないのですが。

とはいって、これは任務です。部隊に所属している以上、任務は絶対に遂行しなければなりません。

夫にとつての無茶振りって、どんなことでしょう？

さまざまの可能性を想定し、吟味し、私はいくつかの無茶振り作戦を用意しました。

作戦決行は、夫が帰宅した、その時です！

・・・夫が帰ってきません。

すでに普段の夕食時間を過ぎてしまっているのですが、夫が帰つてくる気配が全くありません。

なんなんでしょう、この物悲しさ。

すごく楽しみにしていたお出かけの日に大雨が降ってしまったよ

うな、このやるせなれは一体どうしたらこのでしょうか。

せつかぐ、無茶振りをたくさん用意して待っていたのに。

覚書に書き付けた作戦計画書には、こう書かれています。

『夫への無茶振り計画』

- ?夫に晩御飯を作らせる！（胃薬用意）
- ?夫にギャグを言わせる！（ふとんがふとんだー、的な？）
- ?夫に一発芸をさせる！（宴会のネタ練習として）
- ?夫に歌わせる！（候補曲：『聖歌第24章』、『語れぬ物語』、わらべ歌『隣の隣はだーれ？』）
- ?夫を爆笑させる！（わきの下が狙い目？）

67、5行目）』

文字を追つて小さくため息をつきました。

・・・夫が帰つてこなくて良かつたつ！

なんですか、この計画。一体誰が考えたんですか、いえ私が考えたんですけども。

いくら初任務で浮かれていたとはいえ、改めて考えると、これは無いです。

?の晩御飯を作らせるのも、いろんな意味で私の命にかかわってきますし、それ以外のどれもこれも、ある意味一番ダメージを受けるのは、私に違ひありません。

この作戦を考えているときは、完璧な作戦群だ！と自画自賛し

ていたはずなのですが。どうか、？にいたっては、夫が見て赤面してしまつよみうな極めつけの台詞を搜して、一冊丸々読み込んだりしていましたし。

ノリつて怖いです。

初任務を失敗どころか実行せずに終わつてしまつのは非常に後ろめたいのですが、私の人生がかかつています。うん、任務状は見なかつたことにしてしまいましょう！

私は任務状をしまつて、夕食を作つて食べ、先に休ませてもうつことにしました。

・・・ソファの上に、覚書を出してぱなしにしていることを、忘れたまま。

翌朝。

朝に弱いはずの夫に、とても手の込んだ朝食を用意され、『愛の萌芽』P367、5行目からの文章を一字一句正確に暗誦された私は。

・・・絶叫を上げて逃亡し、捕獲されました。

極秘任務・夫に無茶振りし、その反応を確認せよー（後書き）

クマさんは、意外とハイスペックだということが判明した一日。

7 夫を躊躇します。爽やかにわせましょ。 (夫視点) (前書き)

7話の夫視点です。  
妻もいろいろ頭の中でしゃべっていますが、夫も結構いろいろたく  
らんできます(笑)

## 7 夫を躊躇します。爽やかにやれやれもしうべ。 (夫視点)

最近、妻の様子がおかしい。

急に話しかけてきたり、わがままを言いだしてみたり。何か欲しいものもあるのかと思えば、そうでもないらしい。

何か心配事もあるのか、時々見られていないと思つたときを考えこんでいる様子なのが気になるが、その原因は口にしようとしたい。

そんな様子のおかしい妻が、俺の風呂あがりにハサミと櫛と剃刀を手に待っていた。

ここにこじめつたに見せないような可憐らしい満面の笑みで出迎える妻。その小さな手にはハサミと剃刀。

・・・なんだか、いろいろと残念だ。

妻が笑顔のままにじり寄つてくるとこりを見ると、びつやけ、それらの道具一式は俺のために用意したものらしことに気づいた。

とはいえ、剃刀はまずい。

小さな妻がハサミを持とうが包丁を持とうが全く気にならないが、剃刀はだめだ。

もし何かの拍子に俺が動いてしまつたら、妻も無傷ではいられない。

ハサミや包丁なら、怪我をさせぬことなく取り上げることもできるが、刃を直接もつ剃刀は、どうしても怪我をさせてしまう可能性

がある。

さて、どうやって妻の意識をそらせるか。

ぐるりと室内を見回し、田についた椅子を妻の前に引っ張つてきて、当たり前のように座らせた。そのままの流れで妻から道具一式を取り上げても、妻は大きな目を不思議そうに瞬かせて、おとなしく座っている。

最近のやり取りの中で気付いたが、妻は、小動物の子供によく似ている。好奇心が強くて、臆病で。そのくせ、こちらが落ち着いて当たり前のようにふるまえば、それが当たり前なのか、と思い込む。多少の疑問は感じているようだが、拒否しない時点でのこちらのもの。

無邪気な妻だ。

いつもまとめ上げてこむ髪をぽんじていくと、たっぷりとしたつややかな黒髪がうねりながら落ちてくる。

しつとりとした手触りの髪に、妻から回収した櫛を丁寧に通していけば、たつたそれだけで、長い髪が滑らかに流れていく。

その感触を心地よく思いながら、つこどばかりに妻に指圧を施してみた。

置いた俺の手が余るほど、薄い肩。

片手で指が回つてしまつ、細い首。

指先だけで潰せてしまいそうな、小さな頭。

指圧が心地よいのか、うつとりと田を閉じていた妻の首から力が完全に抜ける。もう寝てしまったのか。

本当に、無防備な妻だ。

小さな体を抱き上げてやりながら、胸の内に、おかしさと慈しみともに、ほんの少しの苛立たしさが沸き起る。こんなに何の警戒も無く寝てしまつなんて、よほど俺は信用されているのか。それとも、ただ、意識されていないだけなのか。

・・・それなら、こいつのこと・・・。

不穏な思考が湧き上がりかけたとき、腕の中で眠る妻が、頭を擣り寄せてきた。

無意識に甘えるような、その素振り。起きてこる時には絶対にしない、その動き。

それと同時に、苛立ちと不穏な思考が、凶暴な何かとともに自分の中の奥深くへと戻つていく。

知らず詰めていた息を吐き出すと、丁寧に妻を寝台の奥側へ運んで、寝具をかけて、小さな頭をなでてから、寝室を出た。

居間に戻り、妻から取り上げた道具一式を片付けようとして、ふと、前に妻が言つていたことを思い出す。猛獸使いがどうの、という話をしていたときのことだ。

「髪もおひげもふさふさのふわふわで、ほつぺたに触つてもふかふかの感触ですし、肌に触れているといつよりも、ぬいぐるみの生地に触れてるみたいですよね」

猛獸といふか、ぬいぐるみつぱい。

人間以外のものに例えられることがよくあるが、生き物ですら無いものに似ていると言われたのは初めてだった。・・・しかも、ぬいぐるみ。

髪とヒゲがそつ思わせるらしく、じゃあヒゲを剃つたら妻はどういつ感想を持つのだろう、と思つた記憶が蘇る。

別に髪もヒゲも気がついたら伸びていただけで、思い入れもない。そろそろひつとおしくなってきたし、これからどんどん暖かくなつていくから防寒の意味でも必要がない。

少し考えてから、ハサミと剃刀を手にとつた。

田を覚ました妻がビーブ反応するだろう?

驚くか、笑うか。

・・・朝が楽しみだ。

妻が田を覚ました気配で田が覚める。いつもなら起きてすぐに腕に触れて起こしにかかるといふのに、今日はなかなか起き出さうとしない。

どうしたのだろう? とぼやける頭で考えたところで、いつも以上に、そつと、慎重に触れてくる小さな手。

感触を確かめるように何度も撫でられるのがくすぐつたくて田を開けてみると、何かを真剣に考え込んでいる妻がいた。

その様子を眺めていると、やがて何かを決意したような顔になり、

よつやく田があつた。

思考から戻ってきた妻と田が合つと、一気に顔が真っ赤になつていぐ。

離れていく手の温かさが惜しくて反射的に捕まえた。

細い腕。

こんなに小さくて細くて壊れやすそうなものが、当たり前のよう

に動いている。ほんの少し力加減を間違えれば、たやすく折れてしまいそうな腕。

そんな纖細なものが、どうして俺のように無骨な男のそばにあるのかが不思議で夢を見ているような気もしたが、手のひらから伝わる少し低めの熱は確かに自分以外の温度。

もつとその温度を確かめて、捕まえた手のひらに顔を潜り込ませて息をつく。

温かい。

ヒゲを剃った分、直接温度を感じられるよつな気がして氣分がいい。手のひらが次第に温かさを増していく。甘くて優しい、美味そうな香り。

「だ、旦那さまっー?」

妻のあげた声に視線を向けると、真っ赤になつた妻が困つたように眉尻を下げていた。

ああ、そつか。

「おはよっ」

挨拶がまだだつたな、と思い声をかければ、

「あ、おはよひびきましたー。」

と、どこかやけくそ気味な返事が帰ってきた。

なんだか妙な挨拶だつた気がするが、涙目になつてゐる妻をみて、どうでも良くなつた。挨拶が遅くなつたから、怒つてゐるのだろうか。腕を引っ張るような動きに、ああ、と思つ。温かな手のひらから顔をあげると、妻がほつとしたよつに息をついた。

ちゅ。

ヒゲに邪魔されずに触れた妻の頬は滑らかで、唇にその柔らかさが直接伝わつてくる。

ちゅ。

もう一度その感触を味わいたくて、すぐ反対の頬にキスを送る。真つ赤になつてゐる妻の頬はいつも以上に熱く、つい、それよりも赤く染まる小さな唇に舌が行つてしまつ。

そこは、じぢぢよりも熱く甘いのだろうか。身を屈めよつとじて、妻が頬を抑えて寝具に埋もれてしまった。

少し、遅かつたか。

さきほどみた鮮やかな赤を諦め切れず、そういうえばまだ妻からのお返しを受けていないことに気づいた。掴んだままの細い手首を引つ張ると、寝具の隙間から、チラリ、と妻が濡れた舌を向けて来る。

ぞくり、と背中に駆け上がるものを必死になだめながら当たり前のようになり、自分の頬を指で叩いて催促する。

妻の大きな瞳が驚いたように見開かれるが、ここで引いてはいけない。

あくまで、これは当然の習慣なのだという態度で頬を寄せて待てば、真っ赤になつて小刻みに震えながらも、そつと妻の唇が最後の距離を埋める。

いつもと違う、直接肌に触れる、妻の唇。反対側の頬にも送られたその感触を噛み締めながら、心に誓つた。

・・・これから毎晩、ヒゲを剃ろう。

7 夫を躊躇します。爽やかにわせましょう。 (夫視点) (後書き)

妻、狙われてる、狙われてる(笑)

これ、夫視点の連載を始めたら、そのまま転載しちゃうかも・・・。

妻、近頃よく書くの巻（漫書き）

近頃よく書くの巻（漫書き）

## 妻、こじかの巻

体の大きな夫用にと大きめのクッションを作つてみました。

元々夫の家にあつたクッションも私にはかなり大きいのですが、夫にはちょっと小さいようでしたから。完成した新品クッションを両手で挟んでふかふかな感を堪能していると、ちょうど夫が入つて来ました。

あ。いいことを思いつきました。

「旦那さま、旦那さま、ちょっとこれ持つてくださいー。」

「・・・」

「あ、セーフィやなくて、両腕で押されるような感じで、セーフ！ そうですー！」

ソファに腰掛けた夫に完成したばかりのクッションの両端を腕で抱えるように、持たせてみました。

夫からちょっと離れて確認します。

・・・クマさんです。実家にいたクマさんのぬいぐるみそつくりなリアルクマさん（夫）がいますっ！－

元々よく似ているのですが、実家のクマさんは丸くてふかふかのお腹で、一方、夫は見るからに固そうな、柔らかさとは無縁の体つきです。

でも、こげ茶色のふかふかクッションを抱えた今の夫は、まさにクマさんっ！

「あああ、抱きつきたいです、そのふかふかなお腹の上でお昼寝

したいですっ。

熱心に眺めて内心で身悶えしている私が不思議だったのか、夫が  
じてつと首を傾げました。

ぐはっ！？

最近よく見かける仕草なのに、なんですか、この破壊力っ！ —  
瞬鼻血が出てくるかと思いました。

恐るべし、クッションマジック。そしてグッジョブ、私！

自分で自分を讚えていると、何を思ったのか夫がクッションを横  
に置いてしました。

ああっ！？ 私のクマさんがっ！

思いつきりがっかりしていると、夫はちょっと考えるそぶりを見  
せ、またクッションを抱え直しました。  
クマさんです。クマさんが帰つてきました！

もしかしたらまたすぐにクッションを置かれてしまうかもしだ  
せん。その前によく見ておかなければ、という使命感に燃えてにじ  
りよると、その動きが夫を刺激したのか、素早くクッションから腕  
を伸ばした夫にあっさり捕獲されました。

何するんですか、これじゃクマさんが見れないじゃないですか！  
と憤りつつ体を起こそうとして、ふと、手のひらにふかふかな感  
触が。こげ茶色の、ふかふかクッションです。

・・・気持ちいい。

ちらり、と夫を見上げると、近くに置いていた本を手に取つて読  
み始めるところでした。

あのー？ クッショוןも私も抱えられたままなのですが。  
ああ、腕が長いから特に気にならないんですね。こんな大きなもの一つを全く気にしないなんて、さすが無い無い尽くしの夫です。  
でも、まあ、夫が気にしないなら、もうちょっと堪能しましょうか。

クッショൺと夫の腕に挟まれた状態で少し身動きしてちょうどいい位置に収まるど、私は大きく息をついて目を閉じました。

あつたかくてふかふかで、心地よい昼寝の時間です。

結局。

大きなクッショൺは私の愛用品になりました。

・・・ときどき、リアルクマさんのおまけがついたり、つかなかつたり。

妻、近頃の妻の巻（後書き）

妻の近頃のポイントは、ややこづかさの多いです（笑）

## 極秘任務2・夫を笑わせろ！（前書き）

さあ、また極秘部隊から任務状が届きました。どうする、妻！？

## 極秘任務2・夫を笑わせろ！

秘密部隊からまた極秘任務が届きました。

表書きは確かに私なのですが、見なかつたことにしちゃ おつかな、という誘惑にかられます。前回の夫無茶振り計画は、本当に無茶振りでした。あれは夫よりも私にダメージが・・・と、耳元で囁かれ、夫の低い声を思い出しそうになつて慌てて首を振つてその音を散らしました。

だ、ダメです！ あれは絶対に思い出しちゃダメです！！

熱があつまつてくる顔を指令書であおぎながら、取り合えず、中身を見るだけみてみることにしました。意を決して封筒の中身を開けると、たつた一行。

「夫を笑わせろ！」

・・・いまさらですが、この指令書を発行しているのは、いったい誰なんでしょうか？

どうしていつも毎回夫絡みの無茶振りしてくるんですか！？

夫の笑顔なんて、結婚してから一度しか見たことないんですよ！？

しかも、なぜ笑っていたのかわかりませんし。

・・・そういえば、夫はあの時どうして笑っていたのでしょうか？

会話を思い出しても、特に笑えるような内容でもなかつたですしうーん、ダメです。夫の笑いのツボがわかりません。

でも、でもですよ。もしこれが発見出来れば、いつでも夫の笑顔が見れるようになるってことですよね？ それって、未来の奥さまと円満な関係を築くのにとっても重要なポイントです。無い無い尽くし解消にも役立つこと間違いなしですよ！

俄然、やる気が出てきました。夫の笑いのポイント発見計画、発動です！！

食後のまつたりタイムに夫はいつも通り晩酌を楽しんでいます。ある意味、一番寬いで油断している時間帯。しかもお酒を飲んでいますから、笑いの沸点も低いはず。お皿を片付けるふりをして、夫の背後に回つてスタンバイ完了。

いざ、作戦決行です！！

「曰那さまー覚悟！」

手っ取り早く笑わせるとなれば、くすぐるのが一番！ 夫の脇に手を入れてくすぐりうとしたら、いつの間にか目の前に夫の無表情がありました。

「…あれ？」  
「なんで夫の顔が目の前に？」  
「どうか、どうして私は夫の膝の上に抱えられているのでしょうか？」

頭に「？」をたくさん浮かべて固まつていると、夫が首を少し傾けました。

ああつ、これが髪とヒゲを整える前なら、首かしげクマさんだつたのにつ。

思わず悔し涙を流しそうになつたのですが、夫が少し田を細めて私を見ているのに気づいて、固まりました。

・・・三翻増しで野生化したクマさんが首をかしげると、どうしてか、じつは、身の危険を感じるといつが、狙われているよのうな気がしてしまつのですが。

さ、氣のせこでしょつか、氣のせこですかね、氣のせこだと思こ  
たいです。

慌てて夫の膝から降りようとして、それよりも早く靴を取られてしましました。なんで靴を脱がせるんですか。嫌がらせですか。一いつなつたゞ、再攻撃あるのみです！

どうだー?と夫の様子を伺つとい、田を瞬かせて不思議をうなして  
います。

あれ？

効かないんですか、私の必殺くすぐりの刑。

兄弟たちにこの刑を執行したときは、いつも大笑いしながら土下の勢いで射つてきたものなのですが。

なんだかちよつと負けたような気分になりつつも、諦めきれずに膝小僧をコシヨコシヨコとくすぐりますが、やつぱり無表情のまま

て  
す

何でことでしょう。夫は稀に存在するくすぐりが聞かない人物だ

つたんですね。

計画、失敗です。

というか、よく考えたら、笑いのツボってすぐついたい場所つて意味じゃないですね、そういうえば。

ちえー。といじけて夫の膝から降りようとして、がつしつと足首を掴まれました。

え。なんで足を掴むんですか、相変わらず全く動かせないんですがどうやって掴んでるんでしょうか、といつか離して欲しいのですが！

嫌な予感に背筋に流れる汗を感じつつ、夫の表情をうかがつて、私はビクッと震えて固まりました。

獲物を前にした獣猛な狩猟動物のような目をした夫。その口元には小さな笑みが。

だ、旦那さまが笑いましたっ！

一度目の快挙ですっ！

嬉しさのあまり飛び上がりたくなつたのですが、同時にひどく落ち着かない気分になりました。

夫がじつと私を見ているその視線に、むずがゆいような、逃げ出したくなるような、目を逸らしたいような、けどもつと見ていたいような、とても複雑な感覚に襲われます。

身動き出来ないのに、心臓だけがどんどん早く動いて、熱がでそ  
うで、焦りました。

も、もしかして、これが世に聞く色氣といつものですかー？

前は大好きなクマさんみたいだつた笑みが、どうして今回は色氣  
たつぱりの微笑みになつちゃつたんでしょうか。やっぱりボサボサ  
な髪とぼうぼうのヒゲという名の緩衝材がなくなつてしまつたから  
でしょうか。実に惜しいです。

そんなことをつらつらと考えていたら、夫が掴んだ足の裏をくす  
ぐり始めました。

つー！

反射的に起きる笑いを堪えながら悲鳴を上げて身を捩つて逃げよ  
うとしたのですが、相変わらず全く脱出出来そうにない安定感です。  
この人間安全ベルトめつ。全然安全じゃなくせに、詐欺です！

さんざんくすぐられ息も絶え絶えになつた私は、半泣きになりました。  
がら土下座の勢いで降参する羽田になりました。

ある意味、夫を笑わせるといつ任務は成功しましたが。

・・・秘密部隊の指令は、もうこいつです。

## 極秘任務2・夫を笑わせろー！（後書き）

任務に成功しても、結局夫に負けてしまう妻なのでした。  
そして、夫はめっちゃ楽しinでます（笑）

## 夫による妻観察日記（前書き）

お出かけしましょ？の夫視点のワンシーンです。

花待ち／火兔／2日

妻は最近よく裁縫をしている。

掃除や料理をしている時以外は、たいてい針を手に持つて、なかなかの速さでひと針ひと針丁寧に縫っていく。

一昨日までは薄い青、その前は紺色。

見るたびに違う色合いのものを縫っていたから何を作っているのか、気になつてはいた。

お似合いですよ！ と誇らしげな笑顔を向けてくる妻に、今自分が着ているものが、妻が縫っていたものだと知つた。

俺のために、妻が手作りした服。

薄手の服なのに、いつもよりも暖かな気がする。まるで少し体温の高い妻に包まれているような・・・。

そう思つた途端、妻のように顔に熱が集まるのを感じて慌てて背を向けた。

出発を促しながら、そつと生地に触れる。

賢妻の勉強会は嫌いだが。

・・・たまには、一人で出かけるものいいかも知れない。



## 夫による妻観察日記（後書き）

夫は攻めるのは強くても、予想外の攻めに弱いタイプかも（笑）

初めてのお使い、初めての・・・（前書き）

書類上夫との結婚が成立した数日後のお話です。

## 初めてのお使い、初めての・・・

夫の家にはじめてきたときに、なんて何にも無い台所なんだろう、と呆然とした記憶があります。

調理道具はもちろん、食材もなし。

かるうじて台所にあるのは、「シップとお皿が数枚。

「この人、今まで一体どうやって生きてきたんでしょうか。

一緒に来ていた保護者の奥様が、すぐに調理器具や食材など必要最低限のものを用意してくださったので、それで今まで凌いできましたが、そろそろ小麦が足りなくなつてきました。

お野菜などは庭である程度採れるのですが、新鮮な卵や、ミルクもほしいところ。

それに、私、この家に来てから、まだ一度も街に戻つていないんですね。そろそろ、女性ならではの「こまごまとしたものも買いたしておきたいところです。

そこで私は夫になつた方にお買い物に行きたい、と切り出してみました。

「小麦が切れそなうなので、お買い物に行きたいのですが」

夫が頷きました。行つてきていいんですね。良かつた！

お金は、保護者の奥様から非常用と、当面用の二種類に分けていたいたものがあります。結婚祝いとしていただいたものなので、ありがたく、二人分の食費として使わせていただきましょう。

街についてからどうこうつ風に回るが、なにを買おうか考えていると、夫に紙とペンを渡されました。

見ると、上のほうに「小麦」と書かれています。

あ、忘備録ですね！

卵に、ミルク、お塩、お砂糖、果物、お庭では採れない野菜など、街で売っているかどうかわからないものも、とりあえず希望として書き込んでいました。

食料に関してはこんなところでしょうか。

ある程度書き出したリストを眺めて忘れているものが無いか確認していると、わざとそのリストが夫に取られてしまいました。

夫はわざとその内容を確かめると、それを自分の内ポケットの中へ。

「・・・え？あの、旦那さま。それ、私のお買い物用に書き出したものなんですが」

「・・・これを見つけてくればいいのだわ！」

まだ他に何があるのか？といわんばかりに聞き返してくる夫に、思わず絶句してしまいました。

あ、当時の夫も無口でしたが、必要最低限のこれくらいの文章は話してくれていたんですよ？今なら3分の1以下の「買つてくる」で会話終了です。

今ならそんなにしゃべったことに感動ですが、当時の私は夫の無口さに慣れるのが手一杯で、その短い会話文の中から必要な情報を取り出すのがやつと。

なので、言われた意味を理解した私は、思いました。

・・・女性ならではの必要品を書き出す前でよかつた…

「あの、私が自分で買いに行きたいんですけど」

「…・・じきに茶会が開催される」

なんとなく、無駄だらーなー、と思いつつ、一応主張してみると、よくわからない回答が帰つてきました。

お茶会については、奥様から、結婚後も必ず出席するよ!と言われていますし、確かにそろそろ結婚後初の開催時期ですけれども。

つまり、それまで我慢しin、と?

お、横暴です! 買い物ぐらいいいじゃないですか! 私だつて、新鮮な食材を自分の目で選んだり、いろいろ街の中を見て歩きたいです!

と、とつさに脳内で激しく夫に抗議したのですが、口に出しては言いませんでした。

だつて、ちょうど夫がソファにゆつたりと腰掛けたかと思つと、じつ、と首を傾けたところだったんですね。

ク、クマさん降臨つ…!

その体勢はするいです、反則ですつ!

焦げ茶色のフカフカ感といい、首の傾け具合といい、本当に実家のクマさんにそつくりすぎですよ。

思いつきり机に突つ伏してバンバン叩きたい誘惑に駆られますが、ここはぐつと我慢です。

もちろんクマさんに怒鳴つたり、抗議したり出来ませんし、そ

れよりも抱きつこうとする体と、勝手に動き回る手をとめるだけで精一杯です。

それに、良く考えると、小麦やミルクって結構重いんですね。そのほかの食材に、さらに割れやすい卵となると、私一人で持ち帰るのは困難を極めるに違いありません。となると、夫の申し出に甘えて、買ってきもらつたほうが安全です。

自分用の雑貨については、それこそお茶会のときでも十分間に合いますし、どうせなら一人で買い物するよりも、友人と一緒に見て回つたほうが楽しそうな気がします。

うん、そうですね。

「じゃ、お願いしますね、く・・・曰那わま」

というわけで、買い物はクマさん（夫）にお願いすることにしました。

その夜。

約一年分の小麦に絶対に飲み切れない量のミルク、一体何羽の鶏に産ませたんだという卵など、その他、馬車にぎっしり詰めた食材の数々が届けられた私は。

・・・初めてクマさん（夫）に、こんこんと説教をしました。

初めてのお使い、初めての・・・（後書き）

夫 「大は小を兼ねる」タイプ。  
この時はまだ、二人分の食材の適正量が分かつていなかつたよう  
す（苦笑）

## 壁側で寝かねのわせは（前書き）

「甲斐をわせまじゆ」後のある夜を、夫視点でお送りします。

## 壁側で寝かせるそのわけは

妻が眠そうだ。

そもそも限界に近づいているのか、縫い物の針を何度も刺しそうになりながら、ちらちらと視線をよこしてくれる。

・・・潮時だな。

手入れをしていた商売道具を片付けると、妻も嬉しそうに裁縫道具を片付け始める。その様子を横目で見ながら寝室に入り、寝具の中に入つて目を閉じれば、それほど間をおかず妻が布団の中に入つてきた。

妻の視線を感じつつ、目をつむつたまま一定の呼吸を続けていると、やがてかすかに聞こえてくる妻の呼吸も同じように浅く規則正しいものに変わっていく。

さりにじぱらぐとのままでいると、妻が動き出した。

やはり、今夜もか。

横向きになつて目を開ければ、さつきまで腕に触れていた妻の体が狭い寝台の中を外側へ向かつて転がつていくところだった。ぬくもりが離れていく。

すぐに端まで行き着いた妻は、絶妙なバランスで寝台から落ちはしないものの、そこで落ちそうで落ちない、ぎりぎりの綱渡りのようなバランス芸が披露されている。

初めてこれを見たときは、まさかそんな状態で本当に寝ているとは思わず、そんなに俺と寝るのが嫌なのか、と呆れるとともに少し攻撃的な気分になつたりもしたが。

ただ寝相が悪いだけだとわかつたときには、それはそれで微妙な気分だった。

いつものように、妻を起こさないよう起き上がり、絶妙なバランスでふらふらしている肩を軽く引っ張つて寝台の奥側へ転がす。

大人しく転がつて行った妻は、壁まで行き着くと、しばらく壁に張り付いていたが、また転がつてくる。

待ち構えていた腕の中にまで転がつてきた妻をそつと抱き寄せると、しばらくもぞもぞ動いていたが、やがて大きく息を吐いて、大人しくなつた。一度場所が落ち着けば、再び転がりだすことはない。

この一連の動きを完全な睡眠状態で行うのが、妻だ。

最近は、壁側で寝るのが好きだという、妙な誤解のせいで外側で寝たがるようになつたから、ほほ、毎晩この動きが行われている。

ただ、起きた時に自分が壁側になつていても気にしていないようなので、妻が寝入つた後で遠慮なく転がすこととした。

誤解が解ければ、妻が寝入るのを待たなくていいのだろうが、その誤解を解くわけにもいかないし、ちょっと押せば寝台から落ちてしまいそうな妻をそのままにしておくわけにもいかない。

結局、妻転がしは毎晩続いている。

・・・朝、寝台にいない妻の温もりの名残を求めて奥側で寝ていることは、秘密だ。

壁側で寝かねるのわざは（後書き）

いつもして、妻は毎晩いろいろ転がつてくると。  
毎朝起きると、奥側で寝てこるのはよひつて訳でした（笑）

## 妻と夫のカード勝負（妻視点）（前書き）

もしも、妻が夫にカードゲームで勝負を挑んだら、どうなってしまうのか！？

## 妻と夫のカード勝負（妻視点）

「旦那さまー、私と勝負してくださいー。」

いつもの夕食後のひととき。未だに何に使うのかよく分からぬ道具の手入をしていた夫に、いきなり勝負を申し込みました。

夫はチラリ、とわたしの方を見たのですが、またすぐに手元に視線を戻してしまいます。いつものことながら、きかなかつたことにする気ですね！？

「だーんーなーさまっ！　私と勝負してくださいー。」

さつきよりも大きな声で、はつきりきっぱりお願いすると、夫が小さく息をついてこちらに視線を戻しました。おっ、聞く気になつてくれたようです。

「勝負は、これですー！」

用意しておいたカードを突きつけると、夫が少し不思議そうに瞬きをしました。どうしてそんなものが家にあるんだ、と思つていますね？　このためにわざわざ友人宅まで行つて借りてきたんですよ。

友人はカードゲームやボードゲームの類が大好きですからね、たくさん持つてました。その中で一番絵柄がきれいだつたものを借りてきたんですが、そういえば、友人が本当にそれでいいのか、と何度も聞いてきたのですが、どうしてだつたんでしょう？

まあ、とにかく私は『リービス』と呼ばれるカードゲームを夫

に突きつけています。

「旦那さまはこのゲームをやつたことがありますよね？」

「ぐくり、と頷く夫に、私はしてやつたり！ とほくそ笑みました。

「じゃ、もし私が旦那さまに勝つたら、私のお願ひを聞いてくださいね」

宣言すると、夫がまたちょっと首を傾げました。

それからおもむろに自分を指差します。自分が勝つたときはどうするんだ、ですね？ そんなの、決まります。

「旦那さまは経験者、私は未経験者。これは旦那さまが勝つて当然のゲームなわけですから、旦那さまが勝つてもこの褒美はなしです！」

ズルイって言わないでくださいね。

私は今、友人に詰め込んでもらつたルールを思い出すだけで精一杯の状況なんですから。しかも友人いわく、たぶん夫は強いだろう、と。そんな人を相手にこの褒美制なんか取り入れたりしませんよ！

夫はしばらく何かを考えていたようですが、やがて、手のひらを私に向け、伸ばした5本の指をゆらゆらと動かして見せました。反対の手は頬に当っています。

む、むむ。

これは5回勝負という意味でしうが。

「いいでしょー！ 受けてたちます！」

自分から勝負を申し込んだことも忘れて、意氣揚々と受けたちました。

## その結果

あつとう間に、4連敗。

絵柄を揃えるだけのゲームなのですが、夫の手元には次々と良  
いワードが集まり、私のほうはつらつら前進させます。

どうしてですか、そんなに運が無いんですか、私。

ちゃんと落ち込みそうになりましたが、負けませんよ!

志力最得の六勝負力歴

・・・惨敗しました。

もうっ！ なんなんですか、このカード！

私との相性悪すぎです！

ぶーぶー文句を語つていいるが、夫が手招きで呼んでいます。もし  
かして、もう一勝負してくれるのでしょうか？

か  
ふ

・・・か、かまれたあああつ！！！？

歯は立てていないので、いわゆる甘がみつてやつですね、つてい  
うか、いきなり何してくれちゃつてるんですか、この人はつ！？  
私のほつぺた、まだちゃんとありますよねつ！？

かまれた頬を押さえて、思いつきり動搖していると、満足気な夫が椅子に座りなおし、またカードを切り始めました。

真っ赤になつて立ち尽くす私に、夫がまた5本指を動かし、反対の手はあごをゆつくりと撫でています。

も、もしかして。

次は、あご？

声に出して聞いたわけでもなかつたのに、夫は私に大きく頷いて見せました。

それを見た私は、自分の心臓のために潔く敵前逃亡を図るうと脱兎のごとく逃げ出したのですが。

あっさりと捕獲され。

・・・夫のカードゲームの強さを、いやといつほど、思い知らされました。

いつなってしました（笑）

夫と妻のカード勝負（夫視点）（前書き）

飛んで火にいる・・・？

## 夫と妻のカード勝負（夫視点）

「旦那さまー、私と勝負してくださいー。」

いつもの事ながら、突然妻が言い出した。最近はどうも夕食後の時間が狙われることが多いな、と思いながら、聞かなかつたことにしようと手にしていた商売道具に視線を戻した

「だーんーなーさまつー、私と勝負してくださいー。」

一段と気合が入った声からして、これは相手をするまで引かない気だな。仕方が無い、とりあえず話を聞いて、おかしなことだつたら、別のことにして意識を向けさせればいいだろう。まだ手入れが終わっていない商売道具をひとまず脇に寄せて、妻に視線を向けると、ひどく意気込んだ表情でカードを突きつけられた。

「勝負は、これですー！」

妻の小さな手のひらに丁度納まる大きさのそのカードには見覚えがあつた。

賭け事に良く使われる、『リービス』だ。

どうしてそんなものが家にあるんだろうか。俺の持ち物でないことだけは確かだ。

「旦那さまはこのゲームをやつたことがありますよね？」

もちろんあるので頷きながらも、妻がやけにいい笑顔になつたのが少し気になつた。それにしても、『リービス』なんてどこで覚えてきたのか。鍛錬所の連中から何かよからぬ噂でも吹き込まれたの

か、とも思ったが。

「じゃ、もし私が旦那さまに勝つたら、私のお願ひを聞いてくださいね」

・・・そうでもないらしい。

妻は意気揚々と勝負を申し込んできて、かつ願い事があるとう。だが、その願い事をかなえるためには、勝たなくてはならない。つまり、勝つ氣でいるということだ。

自分が勝つたときのことを考えて、『は、俺が勝つたら?』

「旦那さまは経験者、私は未経験者。これは旦那さまが勝つて当然のゲームなわけですから、旦那さまが勝つても『褒美はなしです』」

・・・やっぱり、鍛錬所の連中が何かいったのだろうか?

しかし、それにしては妻が勝つ氣でいるようだし。

すこし考えてから、妻の反応を見るため、わざと何も言わずに頬を触りながら、反対側の指を動かしてみせた。

「いいでしょ? 一受けたまひます!」

妻は少し考えたあとで、意気揚々と受けたつてみせた。

ところにひとは、やはり鍛錬所の連中からはなにも聞いていないらしい。

もし聞いていれば、俺に『リーバス』で勝負を挑んできたりしないだろ?』

『のゲームは、いわば、いかさまの腕を競うゲーム。

おそらく妻は気づいていないが、賭けの対象についても、妻はすでに了承している。

表面的なルールしか知らないらしい妻が勝つはずもなく。

4連敗までは、残念がつたり悔しがつたりしていたが、5連敗には、カードを床に叩き付けそうな勢いで、憤慨していた。

いろいろ文句を言っているが、そのどれもが俺ではなく、カード自体への苦情だというのが面白い。

どちらにしても、負けは負け。

カードを置いて手招きをし、何の警戒心も無く近寄ってきた妻を腕に囲い、頬に顔を寄せて。

かぽ。

本当は少し歯を立ててやがりと思っていたのに、あまりにも柔らかく、皮膚の薄そうな感触に、なぜか慌てて甘噛みに変えた。

柔らかくて、温かい。

すこし舌に触れたすべらかな肌の感触と味に、満足感を覚える。

もう一度、味わいたい。

熱でも出したように真っ赤になつて立ぢくす妻に、もつひと勝負申し込む。

驚きで大きく目を見開いている妻が、今度はちゃんと賭けの対象が何かも気づいたのがわかった。

次は、その小さなおじを。

大きく頷いて見せると、反射的に逃げ出す妻。それをこちらもほぼ反射的に捕まえて、ゲームの続きを楽しんだ。

・・・妻は、甘い。

夫と妻のカード勝負（夫視点）（後書き）

何勝負させられたのかは、夫次第（にやり）

## 妻が早朝に目覚めたら（前書き）

夫視点にするか妻視点にするか悩んで、結局妻視点にしてみました。  
夫がなにを考えているか、皆さんにはばれてしまいそうな気がします  
す（笑）

## 妻が早朝に目覚めたら

その朝は、たまたま早くに目が覚めました。  
隣では夫が寝っています。

困りました。

ひどく喉が乾いているので、水を飲みに行きたいのですが、いつもよりも早い時間ですし、夫は非常に気持ち良さそうに寝ていて、なんだか起こすのが申し訳ないような気がします。

かといって下手に起こしたら、私の命に関わることは、体験済み。

でもとつても喉が乾いています。

ということは、夫を起こさないよう寝台から降りる方法をみつけなければいいということですね！

私は取り敢えず起き上がつてじっくり考えてみました。

計画？

夫をまたいで降りる。

・・・・・ 残念ながら、足の長さが足りません。夫は寝台の端ぎりぎりまで身体が来ているので、夫をまたいで床に足をつける前に夫を潰してしまいますね、却下です。

計画？

足元の方から降りる。

棚がなけれな降りれるのですが、棚の上を伝つて行くわけにもいきませんし。そういえば、この棚を移動させれば、こんな風に夜に起きたい時に便利ですよね。今度夫に相談してみましょう。

計画？

比較的高さがない足側から飛び降りる。

これも足元の床が悪くなつていなければ可能なのですが、そこ  
の部分の床は私が足を掛けただけでギシギシ音を立てるので、飛び  
降りたら床が抜けるかもしません。危険です。

その後、？？？と計画を立ててみたのですが、どれも不可能で、  
結局寝ている夫をいつもの通り、起こすしかありませんでした。

その朝の朝食の時に夫に棚を動かすか、床の修理をお願いしたの  
ですが、夫は利便性と普通に歩く分には問題ないということで、却  
下しました。

・・・私が起床するには、夫を起こす以外に道はないようです。

## 妻が早朝に目覚めたら（後書き）

もちろん夫妻の家は、全て夫による計画的設計＆配置＆仕掛けです  
(笑)

妻と夫の、 とある畠の田の日常です。

## 妻と夫のある休日

いいお天氣です。

今日はとつても、いいお天氣なんです。

窓の外は真っ黒な雲で覆われていて、なにか細かなものを叩きつけるような小さな音がずっと続いていたとしても、今日はいいお天氣なんです！

外の地面が水浸しになつて、いよいよ、なんだか「ロロロロ」といよが、いいお天氣だったらしいお天氣なんです！

・・・ 今日のお出かけ、中止になつちゃうでしょ？

まだ街以外の場所に行つたことがないので、どこかに連れて行って欲しいとねだつたら、少し離れた場所にある湖まで連れて行ってもらひえる予定だつたんですが。

お弁当も、おやつも、飲み物もちゃんと用意したのに。お出掛け、なくなりちゃうんでしょうか。

いえつ、まだ分かりません！ もしかしたら雨がやむかもしれませんしつ！

晴れる、晴れる、と窓の外の空に念を送つていると、頭の上にぽん、と衝撃が走りました。お、重いつ。一体なにが、と振り向くと夫が立っていました。私の頭の衝撃は夫の手のひらが発生源だつたようです。

「旦那さま・・・」

はつ、まづい、外はまだ私の念が届いていません！

「そ、外はまだ支度中なので、覗いちゃ駄目です！」

私は慌てて窓を背に隠しました。いえ、窓のほうがずっと大きいので、全然隠れていないんですけども、こういうのは気持ちですね、気持ち。

というか、自分で言つておいてなんなんですが、外が支度中つていつたいどんな状況でしょうか。なにを支度しているんでしょうか。とつさにいい誤魔化しが思いつかなかつたからつて、なに言つてるんですか、私つ！？

思わず夫の反応を伺うと、夫は相変わらずの無表情で見下ろしています。相変わらずの無反応っぷりで、むしろほつとしました。

夫は私がおかしな言動をしてしまつても、気にしないてくれるので、その辺は気分的にかなり助かります。

気が緩んで小さく息をついた途端、夫が私越しにカーテンを引いて、自然な動きでひよい、つと私を抱き上げました。

急な動きについて行けなくてバランスを崩し掛けたのですが、すぐに夫の腕が背中に回つてしつかりと固定します。

うん、ものすごい安定感。

でも、急に抱き上げたら危ないですよ！

と抗議しようとしてしたら、ポスツ、という衝撃が走りました。夫が私ごとソファに腰掛け、もぞもぞ動いているなア、と思つ

たら、夫私の間に、焦げ茶色のクッショング。

これ、私のお気に入りの、ふかふかクッショングです。

さらに何処からともなく取り出した可愛いネコのクッキーを口の中に放り込みました。

あ、これは、店主さまの奥さまのクッキーです！

むむむ、しかも私がまだ試した事がない味です。新作でしょうか？  
もぐもぐもぐ味わっていると、今度は、最近お気に入りの作家の本が手渡されました。

うあつ！ これ、まだ読んでないやつです！

今度友人に借りに行こうと思つてたやつですよー！

さやーさやー言いながら、早速読もつと本を開き掛け、はたつ、  
と氣づきました。

夫の方を振り向くと、じつと私のよつすを見ています。

「田舎さま、ありがとうございます！」

どこかほつとしたような優しい目で少やく頷くと、夫も手元に本を引き寄せました。

お気に入りのクッショングに、お気に入りのお菓子、お気に入りの本。そして側には、暖かな夫。

・・・爾の日のお休みも、お気に入りになりました。



## 妻と夫のとある休日（後書き）

いつもして少しずつ、お気に入りが増えていく、夫婦の日常でした。

## 妻と夫の夜のお散歩（前書き）

夜のお散歩も、おつなもんです。

## 妻と夫の夜のお散步

「旦那さま、お散歩に行きませんか？」

リーフェリア祭が近づくこの季節、空から月が消え、真っ暗になつてしまつ分、星がとてもきれいに見える時期もあるそうです。夕食前にチラシと見てみたのですが、木々にさえぎられてしまつて、あまり良く見えません。でも隙間から見える空は、確かにきらきらと星が瞬いました。

もつと開けた場所でゆっくり眺めたいな、と思つたので、夕食後の時間に夫を誘つてみました。

夫は晚酌していた手を止めて、不思議そうに私の方を見ています。これは、質問の意味が良くわからなかつたときの雰囲気ですね。相変わらず無表情のままでですが、最近、夫の雰囲気と視線から感情と思考を読み取る能力が格段に上がってきたように思います。対夫限定の能力ではあります。

「今夜はとても空がきれいですよ。一緒にゆっくりお散歩して、夜空を見にいきませんか？」

もう一度誘つと、夫は杯に残っていたお酒を飲み干して立ち上がりました。

やつた！ これは夫が乗り気になつた動きです！

夫は手早く鞄に何かを詰めると、私が靴を履き替えるのを待つて、外へ出ました。

リーフェリア祭が近づいているとはいえ、やっぱりまだ夜は肌寒

いですね。

それに、星はきれいに輝いているのですが、月が無いので、真つ暗です。自分の足元どころか、少し先を歩く夫の背中さえ見失つてしまいそうな暗さに、思わずしり込みしてしまつたのが失敗でした。

「あれ？ 旦那さま・・・？」

夫の背中、見失いました。

まずいです、これは非常にまずいです！  
自宅前で遭難つて、どんな遭難の仕方ですか！？  
友人に知られたら、何年も言われるに違いありません。それだけは阻止しないと。

いやいや、まだ遭難したと決まったわけではありません！  
大きな声で呼べば、夫が気づいて戻つてくれるかもしれません。  
ん。

「旦那さま・・・っ！」

呼びかけた途中で、暗闇からぬつ、と夫が戻つてきました。び、  
びっくりした、意外と近くに居たんですね。

夫は少し不思議そうに首をかしげて、ああ、と小さくつぶやきました。

「見えないのか？」

「え、見えているんですか？」

夫の貴重な自主的な質問に思わず質問で返してしまいました。

ああ、なんてもつたいないことを…」  
「はははあやんと質問に答えてから聞き返したほうが会話が続いたのに…  
チャンスをふいにしてしまって嘆いて「…夫が」「くん」と頷きました。

えーと、これは私の質問への返事ついでですから、見えている、という肯定の意味ですよね。

ああ、だから明かりの類を全然持つてこなかつたんですね。

「見えないのか？」

夫が、また質問してきた…

どんな奇跡が起きたのか、唖然としてしまいましたが、そんな場合じゃありません、同じ失敗は一度繰り返しませんよ！

「これくらい離れると、田那さまの顔が見えません」

どの程度見えないかを表現しようと少し後ろに下がったのですが、気づけば、夫に捕獲されました。

…えーと。いや、今のは逃げようとか、びびったとかの動きじゃないんですけど、それも駄目なんですか？

ちょっと驚いて夫を見ていると、夫は暗闇の中、明らかに視線を逸らして、私を抱えたまま、歩き出しました。

これ、私のお散歩にならないですよ…

「着いたら、下ろす」

抗議しようとした気配を感じたのか、何かを言つ前に夫に決定さ

れてしまいました。

でも確かに、明かりも無く夜道を歩くのは私には無理そうですね。足元、全然見えていないです。それに風がまだ少し冷たいので、こうしていると夫の体温でとても温かくて心地良いんですね。

私はちょっと悩んでから、力を抜いて夫に寄りかかりました。楽をさせてもらいましょう！

夫の動きが一瞬ぎこちなくなつたような気がするのですが、すぐにもとの通りゆるぎない足取りで進んでいきます。

人一人抱えているとは思えない動きで、家から少し離れた広場のようになつてている場所まで運んでもらつと、夫が地面に立たせてくれました。

「うわあっ・・・！」

夫に支えられて見上げた空では、無数の星々がその輝きを競い合つていました。

こんなにたくさんの星を一度に見たのは、初めてです！

大きいものもあれば、今にも消えてしまいそうなほど小さな瞬きもあります。空には、こんなにたくさんの星があつたんですね。

「旦那さまー、す」「こですね、す」「くきれいです！」

この感動を分かち合おうと夫を見上げると、夫は、まっすぐに私を見ていました。その視線があまりにも強くて、心臓が一音、飛びました。

「ああ、そうだな」

私が見えていないと思ったのか、いつもの首肯ではなく、声に出して返事をしてくれた夫の視線は、いまだ、私に注がれています。

それからもつて来た鞄から敷物と、飲み物、私用のひざ掛けなどを次々と取り出して快適な夜空見学の会場を作ってくれたり。星座や星の名前についての知識が皆無な私の子供のような質問に、簡潔に答えてくれたり。

とても快適で楽しい夜空見学は、空が白み始めるまで続き、夫と交わした会話の新記録を樹立しました。

・・・たまには、じつして夫とお出かけするのもいいものですね。

## 妻と夫の夜のお散歩（後書き）

毎のお散歩と夜のお散歩、どちらが好きですか？

妻と夫のショートショート（ヴァオルフ夫妻×2+夫妻1）（前書き）

ヴァオルフ夫妻に頂いた感想を読んで、妄想が暴走した結果です（いい笑顔）

妻と夫のショートショート（ウォルフ夫妻×2+夫妻1）

? オーダー入ります

店員 「オーダー入ります！『嫁さんと旦那様のイチャラブ（！？）を店の柱の影あたりから覗き見』です！」

ウォルフ 「おお、おお、勝手に見てけ。クマに蹴られてもしらねーぞ」

店員 「いいんすか、ウォルフの兄貴。姉御、喜び勇んで走つて行つちまいましたけど」

ウォルフ 「まで！ミソイツ！！（慌てて妻を追いかける）」

店員 「・・・あーあ、また追いかけていつちまつたよ。姉御の思つツボだつてわかつてゐんだらう。それとも、さすがは姉御といつべきなのか・・・」

? 勝手にしました（ウォルフ夫妻）

ウォルフ 「お前が行つてどうする！？」

ミリィ 「覗き見するに決まつてゐじゃない！ あ、ウォルフも見る？」

ウォルフ 「見るわけあるかっ！」

ミリィ 「怒鳴んなくても聞こえてるわよっ！ あ、もしかして、耳遠くなつちやつた？」

ウォルフ 「お前な・・・もつ、勝手にしろ。俺は知らん」

ミリィ 「はーい、じゃ、勝手にさせていただきまーす」

ミリィ、ウォルフの背中によじ登る。

頭まで登頂するとそのまま、強制的に肩車をさせて、見た目の割

りに柔らかい金髪に顔を埋める。

ヴォルフ 「……で、なにやつてんだ、お前は？」

ミリィ 「勝手にやつてるの。気にしないでいいよー」

ミリィ、ヴォルフの頭でお昼寝開始。

ヴォルフ、ミリィの寝息を聞きながら、下へじらえ開始。

？ その頃、もう一組の夫妻はどうと

妻 「だ、旦那さま、旦那さま！ 店主さまが、頭に何か乗せてますっ」

夫 「……ヴォルフの妻だ」

妻 「えつ、あの方が、あの焼き菓子の作者さまですか！？ えーと、あの、旦那さま？ どうして店主さまは、奥さまを頭に乗せているんでしょうか？」

夫 「…………（不思議そうに店主夫妻を見る）」

妻 「店主さまは獅子っぽいって思つたんですけど、奥さまは、子猫みたいな方ですねえ」

夫 「…………（微妙な沈黙）」

妻 「いいなあ、気持ちよさそつ……つて、旦那さま！？ 違います、違いますよつ！？ やつてほしいってことじやないです、旦那さまつてば、今日私スカートだから絶対に出来ませんからねつ！」

？」

妻と夫のショートショート（ウォルフ夫妻×2+夫妻1）（後書き）

ミロイ＝ミローディアは、ちまつこいけど、逃げまわるウォルフさんをとつ捕まえて旦那にした、ある意味最強の狩人です。  
・・・でもちまつこい（笑）

## 妻と夫の晩酌（妻視点）（前書き）

妻の思い付きから、おかしな方向へ進んでいったら、こうなりました。

## 妻と夫の晩酌（妻視点）

「いつものように夕飯の支度をしている時の」とです。

はたと気付いたのですが、私、これまで夫の無い無い~~匂~~くし改善のためにあれをして欲しい、これをして欲しいと要求する事はあっても、何かをして上げるという事をしていませんでした。

これはいけません。一方的に何かを要求する~~よう~~では、夫婦生活はうまくいかないとありますものね。

私も夫の為に何かをしてあげましょ~~う~~！

と、決意したのはいいのですが、夫のためになる~~こと~~なんでしょう？

しばらく夫を観察してみたのですが、何がして欲しいか、よく分かりません。

分からぬなら、聞いてみるしか無いですね。

これで夫とのやりとりも増えますし、一石二鳥の作戦です。

というわけで、例によつて例の如く、夕食後のリラックスタイムを狙います！

・・・最近、本当にワンパターンですよね、私。次は朝の二度寝タイムに仕掛けてみましょうか。

次の急襲予定を立てつつ、晩酌を始めていた夫に直球で聞いてみました。

「旦那さま、何かして欲しい事つて無いですか？」

食卓に身を乗り出さよつて聞いて、夫はひょっと考へて、いるよつて。

お、ここの感じは、無視しようとしたこませんね。ところが、何かして欲しい事があるのでしょうか？

ワクワクしながら回答を待つて、そのまま、コテツと首を傾げてしましました。

あれ。何も思いつかなかつたんですか？

ダメですよ、これじゃやりとりが成立しないじゃありませんか！

「な、何かないですか？　あ、して欲しい事じゃなくて、させたいことでもいいですよ！」

私も夫に早寝させたり、時々ぬいぐるみのクマさんになつて欲しくて焦げ茶色のクッショングを押し付けたりしてますしね。

ここは夫婦らしくお互に様な関係でいきましょー。

そう思つて更に身を乗り出して言つたのですが、何故か夫は飲もうとしていたお酒の入つた杯を置いて額に手をあてて、がっくりうなだれてしましました。

何だかひどく疲れているよつとも見えるのですが、どうしたんでしょう？

そんなに私にして欲しいこととか、させたいことを考へるのは負担だつたとか？

いえ、夫は常に即決の人ですから、優柔不断で選べなくて困るということは無いはずです。

分からぬいなあ、と夫を眺めていると、一瞬背筋に寒気が走りま

した。

夫が額に当てていた手を離して顔を上げる直前、いきなり席を立つて離れたくなる程の何かを感じた気がするのですが、顔を上げた夫はいつも通りの無表情です。

な、何だつたんでしょうか、今の。

これまで感じたことがない類の悪寒というか・・・いえ、多分風邪のひきはじめだったのかも。うん、きっとそうですね！

自分にそう言い聞かせていると、夫が置いていたお酒を飲みほして小さく息をつきました。

あんなに一気に飲んで大丈夫なのでしょうか？

そういえば。

夫がいつも飲んでいるお酒って、どんな味なのでしょう？ ほぼ毎晩同じお酒を飲んでいますから、ここに夫の好みの秘密が隠されているのかもしれません！

お酒の入った瓶の口に鼻を近づけて匂いを嗅いでみようとするべく、夫が持っていた入れ物を渡しました。

あ、確かにこっちの方がよく匂いが分かりますね。

うーん、何となく、アルコールの匂いがするような？ 色は綺麗な飴色。ちょっと揺らすと、アルコールと一緒に独特の香りがたちのぼります。

味はどんなでしょうか？

いつも夫が水のようになじけて飲んでいるので、完全に油断して

ました。

口をつけてみると、夫がちょっと慌てていた様な気がします。

・・・出来れば、もうちょっと早く止めて欲しかったです。

一口ジョッくんと飲み込んだ瞬間、思いつきり噎せました。

何ですか、これ！

アルコールですよ、まんまアルコールですっ！！

香りとか味わいとかを楽しむ余地はありません。口から喉から焼けついたように熱いです。

それでも根性で食卓の上に杯を置いて咳き込んでいると、夫が水を汲んできてくれました。

命の水です！

洗い流す様に水を飲んで、ようやく咳が止まりました。

「つ、体の中からアルコールが立ち上つてくるようです。夫はなんでこんなものを毎晩欠かさず飲んでるんでしょうが。

「旦那さま、喉が痛いです」

水差しからお代わりの用意をしてくれている夫に、誰かが話しかけてます。

・・・あれ？

「喉が痛いし、お酒くさーし、全然美味しいですよー。」

え、ちょっと待つて下さい。話してるのは私ですか？ 私っ！？

「美味しくないものを飲んだら駄目です、禁止です、美味しいものが飲みたいです！」

なにいつてるんですかあーっ！？

内心めちゃくちゃ焦っているのに、私はお水のコップを夫に突きつけながら、どさくさに紛れてわがままを言っています。

「え、違うんです、これは私であって私でないというか、第二の私というか、えつ、私もしかして二重人格ですか！？」

外と中が一致しなくて大混乱を起こしていると、夫はしばらく顎を触つて何かを考えているようでした。

「あ、この癖はまだフワフワのヒゲがあつたときの名残ですね。今はつるつとしていますが、野生化する前のクマさんはよくヒゲに触つていましたものね。やつぱりフカフカ感が気持ちいいのでしょうか。もつと触つておけばよかつたなア、と内なる私が現実逃避している間に外側の私は夫にぎやーぎやー何か主張しています。

いや、もう勘弁して下さい、私・・・（泣）

夫は台所に入つて行つて、何かを持つて戻つてきました。何だか、綺麗な色をした飲み物みたいです。

「ふーふー文句を言つている外側の私に飲み物を渡すと、どうやら外側の私も色が気に入つたらしく、歓声を上げながら一口。

あ。これおいしいで

「おーしーつ！えらい、旦那さまえーらーーー！これなら飲んでよし！許可しましょー！」

だから、なんでそんなに偉そつなんですか、私！！

そして何となく面白がつてますよね、旦那さまつーーー！？

内心の叫びなど知らずに、夫も果物の爽やかな甘みと酸味がきいた綺麗な飲み物に変えて、2人の酒盛りが始まりました。

・・・まあ、夫も楽しそうにしているので、良しとしましようか。  
内側の私もお酒が回ってきたのか、あとはただただ楽しいばかりでした。

翌朝、記憶が若干飛んで一皿酔いで苦しむ私を、やけに「機嫌な夫に介抱してもらひながら、心に誓いました。

・・・お酒は、ほびほび。

妻と夫の晩酌（妻視点）（後書き）

酔っ払い妻は、陽気な性格になるようになります（笑）

## 夫と妻の晩酌（夫視点）（前書き）

夫視点のリクエストを頂いたので、のりのりで書いた小話です

## 夫と妻の晩酌（夫視点）

「旦那さま、何かして欲しい事つて無いですか」

今朝から妻の様子がまたおかしいとは思つていたのだが、いつものように食後の酒を楽しんでいるときに、食卓を挟んで身を乗り出すようにして聞いてきた。

また何かたぐらんでいるのだろうか。

妻の「たぐらみ」とのほとんどが無害なものだから、別に質問に答えたところで問題無いのだが。

して欲しいこと、か。

しばらく考えてみたが、特に思いつかない。

「な、何かないですか？　あ、して欲しい事じゃなくて、させたいことでもいいですよ！」

して欲しいことが特に思いつかなかつたことがわかつたのか、さらには身を乗り出すよつとして、させたいことを考へろ、とせり言つてくる。

させたいこと。

酒を置いて、額に手を当ててうなだれた。

とりあえず、食卓に両肘をついて身を乗り出してくるのを、やらせたい。

今日は妻はウーマの世話をもしていたのか、動きやすい黒のズボンと濃紺のシャツというでたちなのだが、そのシャツは、俺のだ。

当然、襟ぐりも大きく、ボタンの間隔も広い。

一番上のボタンを外しているだけなのだが、それだけで、かなり大きく開いてしまつていて。

濃紺のシャツと、白い肌。

させたいこともしたいことも、山ほどあるのを、この小さな妻はまだ知らない。

知らせないようにしているのは自分なのだが。

この無邪気さを、時々、引き裂いてやりたくなることも、ある。

いつのこと……。

と、どす黒い思考に覆われそうになったとき、ふいに一人の友人の声がよぎつた。

その花を惜しむなら。

次のリーフェリア祭まで、耐える。

妻に気づかれないように、大きく息を吐いて、額に当てていた手を外し、顔を上げる。引きつったような顔をしている妻を見て、多少は感じ取ったか、と思いながら、置いていた酒を煽つて、アルコールでぐるぐるした感情を体内に押し戻して小ちく息をついた。

あと、一月ほど。それが、ひどくもどかしい。

氣を紛らわせるために飲み干した酒を注ぎ足すと、妻の興味が酒につづったのか、瓶の口の匂いを嗅いでいる。

どこか小さな生き物を思わせる動き。小さな鼻で小さな瓶の口から匂いが嗅げるのだろうか、と不思議に思いながら、手に持つて

いた杯を渡すと、素直に受け取つて匂いを嗅いでいる。

純粋に好奇心いっぱいで、動く妻は、見ていてほほえましい。そんなことを考えていたからか、妻が杯に口をつけたとき、止めるのが間に合わなかつた。

妻が杯に口をつけ、コクリ、と嚥下したとたん、激しく嘔せだした。

クコールは、酒の中でも高純度の酒氣を持つ酒だ。飲みなれない者には刺激が強すぎる。

汲んできた水を飲んでようやく咳が収まつたようだが。

「田那さま、喉が痛いです。喉が痛いし、お酒くさいし、全然美味しいですよ！」

どこか妙な声で妻がしゃべりだした。

「美味しくないものを飲んだら駄目です、禁止です、美味しいものが飲みたいです！」

いくら酒氣が強いとはいえ、たつた一口でよつたのだろうか？

いつもよりも呂律が回つていらない声で、妻が主張している。

主張、しているのだが。咳き込んだせいか、少し涙が浮かんでいる大きな目には、困惑と、羞恥の両方が浮かんでいて。

でも、水の入つた杯を突き出しながら、おいしいものをよこせと強請る妻。

面白い。

顎に手を当てながら、妻の様子を観察すると、その大きな黒目には、次々とめまぐるしく感情と意図が入れ替わる。

いつもの事ながら、言葉以上に雄弁に感情を語る田だ。

「田那さま、聞いてますか、聞いてくれていますか！？ 美味しいものを飲むんですよ、こんな美味しいものを飲んだらいけないのです、わかりましたか！？ わかつたら、私に美味しいものをください！ 美味しいものしか認めませんよ！」

目が、動搖で震えていたかと思うと、諦観が浮かんだのをみて、思わず噴出してしまいそうになった。

本当に、面白い。

「のまましばらく見ていたい気もしたが、眞面目をよこせとうもう一人の妻の主張もかなえてやりたい。

確かに、台所に果実と蜂蜜があつたはず。

以前、フイリウスに教わった女が好む甘く割った酒を持つていぐと、どうやら、見た目から気に入つたらしく、妻が歓声を上げている。

「きれーですね、きれーなものも認めますよー それ、ほしいですー！」

寄<sup>レ</sup>せ、寄<sup>レ</sup>せとせつづいてくる妻にその果実割を渡すと、

「おいしーつー！ えらい、田那さまえーらいーいつー これなら飲んでよしー 許可しましょー！」

みじ」と、許可が下りた。

満足してもらえたようだが、田がまだ動搖し続けていて、俺が面白がつてこむのもちやんとござったのか、涙田のまま、なにやら非難の田向けてくる。

ああ、本当に、面白い。

そのままクゴールの黒実割と一緒に飲みながら、一人の妻が次第にともに酔つていくさまを楽しんだ。

やがて食卓に突つ伏して眠りこけた妻を寝台に運んでやりながら、普段は決して言わないよつた他愛も無い我僕の数々を、田覚めた妻が覚えているかどうかが、楽しみだ。

翌朝。

妻は一晩酔いで、タベの小さな我僕の数々を、覚えていないらしい。

ぐつたりしながら、懸命にタベのことを思い出さうとする妻を眺めながら、知らず、口の端が上がった。

・・・また、晩酌に付き合つてもらおつ。

## 夫と妻の晩酌（夫視点）（後書き）

お酒に弱い妻と、酔つた妻を面白がる夫との間で、静かな戦い（飲まない、飲ませたい）が巻き起こること、必至。

そして勝敗は、推して知るべし（笑）

## //コイ&ウオルフの日常ショートショート（前書き）

やつぱり身長差とか大好きですー。（いい笑顔）

## //ミリィ＆ヴォルフの日常ショートショート

?するの? しないの? の結末（朝の出来事）

ヴォルフ 「おい、ミリィ起きる。朝だぞ」

ミリィ 「うー」

ヴォルフ 「おい、ミリィ」

ミリィ 「…おはよつのちゅーは？」

ヴォルフ 「するわけあるかつ！」

ミリィ 「えー。だつて夫婦なら朝にするもんでしょ？」

ヴォルフ 「…だれだ、そんな歪んだ知識植えつけたやつあ

ミリィ 「するの? しないの?」

ヴォルフ 「するわけあるかつ！？」

ミリィ 「仕方ないなあ」

ミリィ、仰向けで寝ていたヴォルフのお腹の上からもぞもぞ移動して、唇のすぐ脇に。

ちゅつ。

ヴォルフ 「なつ…お前あつ！？」

ミリィ 「してほしいなんて、我慢なヴォルフ。あ、物足りなかつた？」

ヴォルフ 「誰が我慢だつ！？」

ヴォルフ、低血圧とは無縁の朝。

?やるか、やられるか の駆け引き（毎の出来事）

ミリィ 「今日も大繁盛だつたわね！」

ヴォルフ 「お前の焼き菓子もなかなか好評だぞ」

ミリィ 「ヴォルフの料理を食べた後つて、なんでか甘いものが食べたくなるからねー」

ミリィ、ヴォルフの脇中をよじ登り、何かを思いついて、にやり、と笑う。

ミリィ 「ねー、ヴォルフ、『』褒美あげようか？ あ、それともくれる？」

ヴォルフ 「どつちも断る」

ミリィ 「あら、不服？」

ヴォルフ 「どうせろくでもない」と考へてゐるんだろうが。断る

ミリィ 「えー、ヴォルフ『』んないと考へてゐるのー、エロいー、むつつりー」

ヴォルフ 「誰がむつつりだ！？」

ミリィ 「・・・エロいは否定しないのね？ あ、オープンえろ？」

ヴォルフ 「お前、いい加減黙れ」

ミリィ 「はーい」

ミリィ、黙つたまま、ヴォルフの耳を。  
はむつ。

ヴォルフ 「つー！ ミリィーーー！」

ミリィ 「うひひひーわまー」

ヴォルフの背中から飛び降りて、素早く逃げるニコイと追いかけ  
るヴォルフ。

店員 「厨房でじやれないでくださいといつていつも言つてんのに・・・」

ため息をついた店員、一人で片付け再開。

? やつぱりここでもひと悶着（夜の出来事）

「ねー、ヴォルフ、そろそろ諦めない?」

三  
ノ  
イ  
ル

「アーティストの才能を発揮するためには、必ずしもアーティストとしての才能をもつておかなければなりません。」

ミリヤ  
「モル

## 休み、ヴォルフ

「ミリバ  
カカ

ヴォルフ、一人で自分の寝室へ。

ミリ、一ヶ月自分の間

「…いつもいつも、本当にどうやって入ってきやがるんだ」

いつの間にか自分のお腹の上で寝ているミリィに、ヴォルフは小

さため息をついて目を閉じた。

・・・そして、冒頭に戻る。

## //コイ&ウォルフの日常ショートショート（後書き）

ミコティアは、物語中一番ひつじのて、一番強烈な性格をしていますので、副題は『猛獸とかつこい悪魔』でもいいかも、と一時期真剣に考えてました（笑）

友人と私（レイン視点、物語開始前）（前書き）

妻と友人の休日の過ごし方を、初の友人視点でお送りします！

## 友人と私（レイン視点、物語開始前）

私の友人はちょっと変わっていると思う。

多分本人は大真面目なのだろうけど、はたから見ていると、なにをでかすかわからなくて、面白くて仕方ない。

小さな時から、なにかと目立つ兄弟たちに囮まれていても、何となく目が追ってしまうのは、いつもこの友人だった。

その友人の目下の悩みは、夫の「無い無い尽くし」。

割と直球勝負が好きな友人らしいネーミングセンスに、思わず笑つてしまつたけれど、本人は真剣に悩んでいた。

何をしたわけでもないのに、ある日を境に挨拶をしても頷くだけ、話しかけても頷くだけになつたとか。視線が合つてもすぐにそらされるとか。

そんな男は捨ててしまえ、というのが本音だけど、それは言わずには、ただ話を聞くだけに留めておいた。

最初の頃はひどく気にして落ち込んでいたけれど、次第にそれをどうやって攻略するか、作戦を練ることに夢中になつていく友人が面白かったのもある。

ひとつのこと集中すると周りが見えなくなるのも、友人の可愛らしさだ。

どうこう結論に至つて、どういう行動をするか。

それを楽しみにしていたといつのに、数日前からまた様子が変わった。

なにがどう変わったのか、はつきりはいえないけれど、やけに思いつめているように見える。

「レイン、笑茸とか自白剤って手に入らないですかね？」

・・・そういう思いつめているらしい。

「レイン商会は違法行為には手を貸せません。わかってると思つけど、それ、犯罪だからね？ ついでに言つと、笑茸も自白剤も毒だから。下手したら死ぬよ？」

手に入れようと思えば、手に入らないこともないんだけど、そんなことを言つたら確実に暴走しそうな友人のために、ちょっと強めの口調で言つておいた。

友人は、ちょっと考えるそぶりを見せてから、[冗談です、と笑つて見せたけど。

今のは、本気で考えてたな。

呆れた視線を向ければ、気まずげに視線を逸らしてしている。

というか。

そもそも、そんなものを友人の夫に飲ませるために仕掛けたら、その時点で自ぶんで掘つた墓穴に片足を突つ込むようなものなのに。

しかも、そうなつたら間違いなく私も道連れにされる。

薬物の出所としての報復と、自分の妻に余計なことを吹き込んだ報復と、どちらが比重が大きいかな？

うんうううなりながら、ああでもない、じつでもないと悩んでいる友人の首筋に咲いている華を見ながら、苦笑した。

たぶん、友人は気づいてないんだろうなあ。

友人が自分で鏡を見ても微妙に見えない、けれど今の私のように、斜め隣に座れば必ず見える位置につけられた、キスマーク。

どうやら、私は夫殿に警戒されているらしい。

そう思つと、つい、笑いが漏れる。

男装する前から何度もあつていて、既婚者であることも知つているはずなのに、わざわざこんなけん制をかけてくるといつひとは。

・・・今度一度じつくり話をする必要がありそうだ。

友人と私（レイン視点、物語開始前）（後書き）

夫、レインに対してめっちゃ警戒しています（笑）  
虫除けは、本人さえも気付かないようにするのが夫。（つておい）

## わわやかな謀（夫視点）（前書き）

レインが家に遊びに来る前夜の夫視点を書いてみました！

## わわやかな謀（夫視点）

明日は、妻の友人が家に遊びに来るらしい。

ここ最近なんとなくふさぎこみ、ばんやりと何かを考え込んでいることが増えた妻が、今日はやけに張り切って菓子の用意をしたり、茶器を用意したり、部屋を片付けたりしている。

足音をたてながら、くるくると動き回る妻。

体が小さいこともあって、木々を駆け回るリスのようにも見える。

そんな妻の動きを眺めるのは、なかなか楽しいことだし、妻が気分転換できるのはいいのだが、その動きが全て妻の友人のためのものだと思つて。

少し、面白くない。

月に一度の集会で、いつも妻が真っ先にその姿を捜し、駆け寄つていく相手は、妻と同じ黒髪に、黒い瞳をもつ男装の女。

男装しているとはいってもともとの性別は女であり、一時期だけだがグレインの妻であったこともあるとわかつてもなお、二人が並ぶと似合いの恋人同士のように見えて。

・・・かなり、面白くない。

せめて男装をやめれば、普通の友人同士に見えるだらう。

「はい、旦那さまー、蜂蜜クッキーを焼いてみたんです。どうです

か？」

思考に沈んでいる間に妻が近づいてきて、焼きたての菓子をひとつ、渡してきた。

食べてみると促す動きに、ひとつまんで食べてみると、蜂蜜の甘い香りが口の中に広がる。

かなり甘いが、うまい。

じつ、と反応をつかがう妻に、小さくひとつ頷いて見せると、嬉しそうに笑った。

「大丈夫そうですね！ レインが好きな蜂蜜クッキー、かなり久しぶりに作ったのでちょっと心配だつたんですよ」

・・・やはり、面白くない。

楽しげに明日の準備をする妻をこれ以上見ていたら、何かを仕出かしてしまいそうな気がして、早々に寝室に引き上げた。

こつもよりもかなり遅い時間になつて、ようやく妻が寝室に入つてくる。

焼き菓子の甘い香りを漂わせながら、あつといつ間に眠りについた妻はいつも通り腕の中に転がつてきた。

いつものように大きく息をついて、身動きを止めた妻をじばらぐ見下ろし。

そつと妻の首筋に唇を寄せた。

妻が鏡を見ても見えない、ただし、横に座れば必ず見える位置に、ひとつ。

念のため。

それから、少しだけ、服の襟元をくつり上げて胸元にも。

・・・ひとつでは、とまれなかつた。

わわやかな謀（夫視点）（後書き）

絶妙な位置の、ひとつだけじゃ無かつたようだす。

そして、妻は気付かない（笑）

## 妄想劇場 ～夫・クマ、妻・シャケ～（前書き）

もしも、夫がクマで、妻がシャケだったら…？ といつ妄想から生まれた妄想劇場を、お送ります（笑）

完全に妄想ですので、本編とは一切関係ありませんので、別物語として、お楽しみいただけると嬉しいです。

では、はじまり、はじまり～

配役：クマ（夫）  
シャケ（妻）

「ここにちは、シャケです。

私、このたび目出たく生まれ育った川に戻つてきました。

目的のひとつは産卵ですが、それだけではありません！

まだ稚魚だった頃に出会つた、の方にもう一度お会いするために  
帰つてきたのです！

そう、あれはまだ生まれて間もない頃のことでした。

増水していく川で遊んでいた私は、いつの間にか水位が低くなつてしまい、くぼ地に取り残されてしまつたのです。日に日に水の量は少なくなつていきますし、ご飯だつてほとんどありません。

太陽の明るさが大好きなのですが、今はそれが私の残りの魚生（人生）を刻一刻と奪つていきます。

雨が降る気配もなく、もう背中が水面に出てしまつている状態で、今生をあきらめかけていたそのとき、彼が現れたのです！

黒くて大きな体に、まん丸の目。

風でふわふわ揺れるふかふかの毛皮で覆われた彼は、私を見つけるとしばらく見つめていました。

そして彼は、その大きな手のひらで私を本流へとはじき飛ばして、助けてくれたのです！

それ以来、彼は時々川辺に来ては、私や他の仲間たちと戯れるようになりました。

けれど、その楽しい交流は長くは続きませんでした。

私たちが海へ向かう時期がやつてきたのです。

私は最後に彼にお別れと、そして約束をしたのです。  
必ず戻つてくるとー

そして今日。

私はその約束を守つて、この懐かしい川辺へ戻つてきました。  
彼は、どこにいるのでしょうか？

そのとおり。

大きな影が差したかと思うと、近くにいた一匹のオスシャケが水中  
からはじき飛ばされました。

この手の動きは！？

私が水面を見上げると、揺れる水面に大きな黒い影が動いていました。  
大きな、大きな影です。

彼です！

全体的にかなり大きくなっていますが、彼に違いありません！

私は彼に挨拶がしたくて、逃げ惑つ仲間たちとは逆に、大きな影へ  
と近づいていました。

水面を一生懸命見上げながら、彼の側でぐるぐる回つていると、彼  
が急に水中に顔をつけました。

やつぱり彼です！

毛はふかふかそうですし、まん丸の目も間違いなく彼です。  
もしかして、彼も私に気づいてくれたのでしょうかー？

嬉しくなつて彼の顔の側に近づくと、彼はちょっと不思議そうな顔をしたあと。

がぶり。

私を咬んだまま、空中へと戻つてこきました。

私、魚なので、水がないこと死んじゃうんですけどーーー？  
エリに空氣が入るとめちゃくちゃ痛いんですよーーー？

ほとんど反射でびりびり体をひねつていると、だんだん意識が遠のいてきました。

せめて、彼と一緒に話せてもういたかったなあ。

今生をあきらめた瞬間、ばしゃん、と言ひ音ともに呼吸が出来るようになった。

み、水！！

水ってこんなに美味しかったでしただけ！？

私は水中をぐるぐる動きながら、彼のほうを見上げました。彼はじつと私を見ています。

私も動きを止め、彼を見つめます。

水と空氣の隔たりはありますが、やっぱり彼です。

ちゃんと、会えました。

私はいつもやのお礼をいって、約束どおり帰つてきましたよ、といったのですが、彼には伝わっていないようです。やはり、彼には魚語はわからないのでしょうか？

でも、いいんです。

こうしてまた会えたから。

嬉しくてまたくるくる動いて気が付きました。  
ここ、私の故郷の川じゃないです。

水流がものすごく緩やかで、ほとんどないといつてもいいです。それにあまり広ではないのですが、その分すごく、深そうです。試しにもぐつてみると、海のようでした。底までは行けなそうです。水面に戻るうとする、水中に彼の顔をみつけました。

また見に来てくれたのでしょうか？

私は嬉しさが抑えきれなくて、彼の前でくるりと回って見せてから、彼の鼻先に顔の先で触れてみたのですが、彼はいきなり空中に戻つていつてしましました。

呼吸が続かなかつたのでしょうか？

それから。

私と彼の生活が始まりました。

・・・ここが私の楽園です。

妄想劇場 ～夫・クマ、妻・シャケ～（後書き）

シャケになつても一途な妻と、クマになつても予想外の攻めに弱い夫なのでした

我が家に馬（～）がやって来た！（前書き）

ウーマさん、初登場！

## 我が家に馬（？）がやつて來た！

結婚して数日がたつたある日、夫が馬っぽい生き物を連れて帰つて來ました。

「つぽい」というのは顔は馬なのですが、私が知る馬よりもかなり身体が大きく、足も太い。馬つて足を骨折したら致命傷だと聞くのですが、かなり力強そうな足腰をしていて、これを折るのは無理な気がするほどの大太さです。安定感抜群で、聞いたところによると見た目通りに力強いそうです。

でも顔は馬なので、目が大きくてクリクリしていて可愛いんですね。

そーっ、と手を差し出して、手のひらの匂いを嗅がせて見ました。大人しくかいです。

うん、これなら撫でられそうですね！

驚かさないよう慎重に手を伸ばして耳の後ろを撫でてあげました。気持ち良さそうにしています。うん、可愛い。

「いい子ですね！ 田那さま、この子の名前はなんですか？」

夫の方を振り向くと、ちょっと驚いたような顔をしていました。最近、夫は無表情が基本だとわかつて來たので、私までびっくりしてしまいました。

「あの、名前を聞いたら不味いんでしょうか？」

心配になつて聞いてみると、夫は小さく首を振りました。じゃあなんでそんなにびっくりしていたんでしょうか？ 不思議な人です。

「名前は、何がいい？」

夫が聞いてきたので、ちょっとと考えてみました。

「私が暮らしていたところの馬っぽいので、馬とかどうですか？」

いや、正直私もそれはないかなあ、と思つていたのですが、夫が  
とっても微妙な顔をしました。

馬（仮名）まで、その大きなつぶらな瞳を悲しげに揺らしています。

いや、ちょっとと言つてみただけで本気じゃ無いですよ！？  
流石の私も、犬に猫つて名前をつけたりしませんって！

慌てている私をよそに、夫が馬（仮名）に向かって、

「ウマだ」

と断定的に言いました。

その時の馬（仮名）の顔と言つたら。

つぶらな瞳にいまにもこぼれ落ちそうな涙を浮かべて、この世  
の終わりのような悲しげな風情で震えています。

「ああいつ、めんなさい、ほんとじめんなさい……

その後、私の必死な説得により、「ウーマ」というひょっとあん  
まり変わらないんじゃないか、という名前になりました。

全くなにも考えていらない訳でもなく、なんでもこじりではウー  
マとは縁起のいい名前だとか。

・・・ウーマ（確定）も、私も、心底ホッとした。

## 我が家に馬（^~^）がやつて來た！（後書き）

教訓1：名前は一生ものですから、あやんと考へましょ。つ。

教訓2：夫に冗談は通じません。

妻との一語の出来事（夫視点）（前書き）

我が家に馬（？）がやってきた！の夫視点です。

本当は面通しをするだけのつもりだったはずが・・・？

## 妻とワーマの出会い（夫視点）

ある日、仕事の都合で、ボウドウを一頭家につれて帰った。

ボウドウは本来戦闘用なため、気性が荒い。実際気に入らない相手の腕を噛み切ることもあれば、格下の相手は決して乗せたりはない。

戦闘になれば、自ら敵に体当たりをかけるほど勇猛もある。

間違つても妻に危害を加えないよう、顔合わせをさせぬつもりで妻を厩舎に連れてきたのだが。

いつも思いがけ無いような行動に出る妻が無防備にボウドウに手を差し出した時には、肝が冷えた。

見知らぬ人間の手など、ボウドウにとつては、攻撃対象にしかならない。

妻の腕が食いちぎられる、と反射的に妻を引き戻そうとしたのだが。

予想外のことが起きた。

気性の荒いはずのボウドウは妻の手の匂いを嗅ぎながら、大人しくしていた。妻はさらに手を伸ばして撫でるのもそのまま受け入れている。

・・・あまりにも妻が無邪気で、毒気が抜かれたか。

妻に聞かれて、そういうふうな名前をまだつけていないことを思い出

した。

ボウドゥにはおかしな習性があり、名前をつける、呼ぶことを許した相手には決して危害を加えないといつ。

その代わり、名付けを許すほど懐かれるには数年かかる場合もある。

試しに妻にどんな名前がいいか聞いてみると、「ウマ」と答えた。なにかの生き物の種族名だという。それを名前にするのはどうなんだ、とも思ったが、まあ妻がそれがいいと言つなら。

「ウマだ」

名付けると、ボウドゥは奇妙な表情をしたかと思つと、田に涙を溜めて妻の方を必死に見てくる。やはり、名付け親の一人として、妻を認めているらしい。

その後、なぜかウマと名付けたはずの妻から必死の訂正を受けて、結局音が似ているウーマという神話の中の名を提案すると、妻はボウドゥにそれでいいのか確認した。

ボウドゥも今度は特に不満はないのか、何度も頷いていふのだ。

妻はホッとしたよつてウーマの頭を何度も撫でてやつてくる。

じつをじつかりと見てから、妻にも視線を向けたウーマは、二人共に名付け親として認めたよつだ。

それからしばらくの間、ウーマが妻に懐くところも、妻がウーマに懐いているような状態が続いた。

・・・ウーマを仕事に連れて行くことが、増えた。

妻とウーマの出会い（夫視点）（後書き）

妻、動物に懐かれるタイプだったようです。  
そして結局、ウーマさん今まで嫉妬してしまつ夫なのでした（苦笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9765y/>

---

離縁します！～小説集～

2011年12月19日21時00分発行